

## 故沢野伸浩教授追悼特輯発行に際して 沢野先生、スマイル・スマイル・スマイル

篠 崎 尚 夫

金沢星稜大学女子短期大学部学長

本学経営実務科に学科長としてご尽力くださった沢野教授を失って早半年以上になりますが、ここに『星稜論苑』に追悼特輯を発行するにあたり、謹んで先生のご冥福を祈り、本特輯を先生のご霊前に捧げます。

沢野先生が星短に残された教務・学生支援に関わる伝統は、現在も形を変えながら「発展」しつづけております。「イノベーション（革新）」とは、既に存在する「多様なモノ」の「新しい組合せ」、「新たな取組み」から生じる「創造」だと思います。

沢野先生が、学生とともに、東北の被災地に向かわれた「2012年夏休みの朝」を今も憶えております。私の星短新人時代でした。沢野先生は、そのとき穏やかな「笑み」をもって、学生たちを眺めながら出発されました。私は、教務の福田さん、廿日岩さん、当時の西田事務局長とともに、「手を振って」見送りました。正直、心配でした。「ちゃんと戻って来られるのかなあ……」。それは杞憂でした。途中、メール等の連絡があり、現地の様子がわかる写真も添付してくれました。そして、お土産が、何故か「カップラーメン」だったのに驚かされ、と同時に「無事安心」を喜びました。ふっと、「可笑しみ」も感じました。

「百人カレー」のときの沢野先生も、穏やかな「笑み」をもって、学生たちを眺めながら、一緒に調理し、食していらっしやった。運動会の際も同様。つまり、私の「沢野先生像」は、「クマのプーさん」のように、穏やかな「笑み」をもって、学生たちを眺めている姿、これです。「楽しそう」な姿です。何かを、気の合う学生とともに、「夢中」でなさっている姿。大きなお腹を揺らしながら「大縄跳び」の縄を振り回している姿。「お弁当」を平らげている姿。「コーヒー」を啜っている姿。「お菓子」をつまんでいる姿。いきなり、突然「English」で「Speech」される姿。どれこれも沢野先生です。「環境の話」かと思えば「英語の話」、そうかと思えば「数学の話」、「情報の話」……。みんな沢野先生なのです。

「金沢税務署にて『税務実習』を受講!」、「将来、自分らしく働き、自分らしく生きるためのキャリアデザインを描きましょう」、「『実践人の家』夏期全国研修大会に参加」、「人間学塾・中之島の宿泊研修 in 金沢の運営サポート」、「『2015 PC Conference』で2年次の吉田さんが発表」、「着物 DE 京都巡り」、「新しいホテルを見学」等々。2015年度も、星短のホームページは輝き続けております。それぞれのゼミが、それぞれに特徴を活かした（「発展」した）姿を映し出しております。これらの映像の中から、「沢野スマイル」が飛び出して来るような気がします。「カップラーメン」を片手に……。<sup>(注)</sup>

注記：今度は、「手を振って」、お出迎えをしなければなりませんね。

## 彗星のように現れ、そして去っていった沢野さん

今 中 哲 二

京都大学原子炉研究所

沢野さんのことを初めて知ったのは、福島原発事故が起きた翌年の 2012 年 7 月のことだった。原発問題を通じての古い知り合いであるジャーナリストの明石昇二郎さんから、福島の放射能汚染地図が送られて来た。日本政府が当時発表していたものよりはるかに詳細な汚染地図だった。事故直後に米国 NNSA（核安全保障局）が行った福島県上空での航空機による放射線サーベイデータを、金沢星稜大学の沢野さんが GIS（地理情報システム）技術を使って作成したものだそうで、避難区域の一軒一軒の位置でのセシウム 137 の汚染レベルを判別できるほどの分解能だった。

飯舘村の放射能汚染調査に関わっていた私はその地図をみて「よしこれで飯舘村の初期被曝評価は何とかなる！」と勇み込んだ。というのは、飯舘村で大規模放射能汚染が起きたのは地震・津波から 4 日後の 3 月 15 日であったが、飯舘村に正式に避難指示が出たのは 4 月 22 日のことで、人々はそれから避難をはじめ、避難し終わったのは 7 月末頃だった。つまり、いち早く避難が実施された原発周辺 20km 圏内の町村に比べ、もっと離れていた飯舘村の住民の方が大きな初期被曝を受けたことは明らかだった。一軒一軒の汚染レベルを特定できる沢野地図を使えば、放射能汚染が起きてから避難するまでの被曝量を村民一人ひとりについて見積もることができる。

さっそく沢野さんと連絡をとり、初期被曝評価の作業への協力要請を行った。そして、内閣府の原子力対策本部が公募を行っていた研究調査事業に『福島第 1 原発事故による飯舘村住民の初期被曝放射線量評価に関する研究』というタイトルで応募したところ採択された。それから 2 年間、私と沢野さんは飯舘村の初期被曝評価というテーマをめぐって濃密な共同作業を行った。1 年目はもっぱらパソコンを用いたデスクワークで、飯舘村全域 1,700 戸についての汚染レベル評価とデータベース化を行った。2 年目は、大学研究者、NPO 活動家、フリージャーナリストあわせて 25 人のチームを組み、放射能汚染が起きてから避難するまでの飯舘村の人々の行動についてインタビュー調査を行う『飯舘村初期被曝評価プロジェクト』を実施した。その結果、飯舘村住民の 3 割にあたる約 500 戸、1,800 人の行動調査データが得られ、2014 年春に、飯舘村の人々の初期外部被曝評価や平均 7 ミリシーベルトという結果を報告した。

2 年あまりの共同作業を通じて、沢野さんのバイタリティと集中力には私は驚嘆していた。今年の 3 月には、つくばで開催された環境放射能研究会でともに発表するはずであった。それが、2 月の予稿メ切りの段階で沢野さんから、『体調がよくないので発表取りやめ』とのメールが入った。めずらしいことと思いつつも気にも留めていなかったのだが、その環境放射能研究会の 3 日目に明石さんから『沢野さんがなくなった』というメールを受け取った。

いつも、ちょっとはにかんで人なつっこい、あの沢野さんにもう会えなくなった。

## 沢野先生安らかに

後 藤 真太郎

立正大学地球環境科学部環境システム学科

1997年1月2日未明、ナホトカ重油事故が発生し、1月7日に船首部分が三国に漂着し、大量の重油が洩れました。その対策で沢野さんが作ったメーリングリスト oil で呼びかけ、雪の積もる金沢大学の経済学部の会議室に集まりました。その会議が沢野さんとの最初の出会いである。沢野さんは、重油は漂着した直後から漂着した後の事を想定し、どのように被害を軽減させるかという議論を投げかけており、1日 200 通くらいのメールが流れていた。その中では、海岸線にムシロを敷いて浜の生態系破壊を防止するとか当時日本では馴染みがなかったバイオレメディエーションのことなどが真剣に議論されていました。Facebook や Twitter などの SNS が全くない時代のことです。

その会議の直前まで海岸に漂着した重油の調査をした様子が服装から知ることができた。自己紹介の時には奥様への発言もあり、ナホトカ重油事故以来沢野さんが忙しく、事故の危機もさることながら夫婦の危機があると言われていたことが印象的でした。

その後、事故の教訓を後世につなげる必要を感じ、研究グループを立ち上げ、科学技術振興機構に応募した研究が採択され沢野さんにも参加していただき、漂着油のモニタリングを行うシステムの開発や、浜の形状によって重油の漂着状況の特性を調査していただきました。この研究の中心的なテーマが GIS（地理情報システム）であり、この研究がきっかけで沢野さんは GIS のエキスパートになっていった他、この中でまとめた結果が 10 年後、博士論文になってまとめ、私が主査として審査した博士の第一号になったことは指導教員としての誇りです。

研究が始まる頃、GLOCOM の依頼で事故の教訓を海岸管理に活かすことを議論する委員会が立ち上がり、アメリカに出張する事になったが、出発の日にパスポートが切れていることに気付き、難しいとは思いながら沢野さんに電話して代理出席をしてもらったこともありました。出発の当日の朝、学校に行く途中に電話を受け、その日の午後に成田からアメリカに向かって出発するといった電光石火の早業でした。

科学技術振興機構の油汚染対策のプロジェクトはフェーズ 3 まで続き、最後は研究成果を実装させるために NPO まで作り、沢野さんにも理事になっていただきました。また、公募プロジェクトの際には沢野さんにメンバーになっていただき主要なポジションを担当していただきました。このようなやり取りから、沢野さんが自らの企画で研究をしたりするスタイルに変貌し、それにとどまらず NPO 等の組織を作って組織の維持のために委託を受けるようになった事は少なからず私の責任もあったように思えてなりません。

2011年3月11日に発生した、東日本大震災の後は、発災に伴う、福島原発事故後、米軍がネットで公開した放射能実測値を GIS を使って「セシウム汚染地図」を作成しその公

開方法につきコメントを求めてきたことがありました。相談を受けても自身の方向性は決まっているのだらうと思いつつ「自分の研究の方向性を見失わないように」回答した記憶があります。その結果は、2年後には『本当に役に立つ「汚染地図」』（集英社新書）になって公開され、自身も福島原発訴訟で放射性物質による汚染状況につき、専門家証人として意見陳述をおこなうなど獅子奮迅の活躍をしていると同時に、震災復興事業に直接的にかかわっていたことが自らのスケジュールを狂わせてしまったように思います。

今でも、急に「〇〇をやろうと思うんですが……」という電話が入ってくるように思えてなりません、事実は事実として認めなければなりません。沢野さんは今、生き急いだ分、安心して休息をとっているのではないかと思います。沢野さんの成果はその意思を継いで形にしていきたいと思いますので安心して下さい。